
対談 儀礼としての民衆デモ

—韓国・香港・台湾の事例をめぐって—

真鍋 祐子¹

伍 嘉誠²

司会：藤野 陽平³

2021年7月12日実施 (Zoomによるオンライン対談)

2010年代に東アジアでは、同時発生的に、若者を中心としたデモが起こった。それらのなかには各国の体制を大きく動かし、政権交代にまでつながる大きな変化をもたらすものもあった。

この対談では、真鍋祐子氏には韓国、伍嘉誠氏には香港、そして司会の藤野陽平氏には台湾を対象に、情報提供していただきながら、各国でのデモと宗教団体や信仰者とのかかわりについて、またそれぞれのデモ自体に宗教的・儀礼的な側面があるかどうかについて、各国を比較しながら語っていただいた。

¹ まなべゆうこ : 東京大学東洋文化研究所教授

² ごかせい : 北海道大学大学院文学研究院准教授

³ ふじのようへい : 北海道大学大学院メディア・コミュニケーション研究院准教授

2010年代の韓国・香港・台湾における民衆デモ

藤野 この対談は、近年注目されている、東アジアの体制を大きく動かし、台湾や韓国では政権交代にまでつながった若者を中心としたデモを、〈儀礼〉として捉え直す試みとして企画されました。真鍋先生には韓国、伍先生には香港、そして司会の私は台湾の事情について、お互いに情報交換するかたちで進めていきたいと思います。

台湾では2014年3月18日に**ひまわり学生運動**が発生しました。これは当時の国民党政権の馬英九ばえいききゅう総統が推し進めていた「サービス貿易協定」(中国・台湾間で自由貿易をする協定)がきちんとした議論もなく採決されようとしていたところ、学生や若者たちが立法院(日本の国会に相当)に流れ込み、38日間占拠して、結局廃案に追い込んだというものです。馬英九政権は8年続いたのですが、この事件から約2年後の2016年の選挙の結果、政権交代が起こり、蔡英文さいえいぶんの民主党政権が誕生しました。ひまわり学生運動が政権交代の大きなきっかけになったのです。

香港の雨傘運動や韓国のろうそくデモなども近い時期に起こっており、体制に対する反発という同じような文脈に位置づけられる出来事だと思います。まず、これらの事件の過程について、それぞれ簡単にご紹介いただけますでしょうか。真鍋先生よろしいですか？

真鍋 韓国の**ろうそくデモ**は、一般には、2016年の11月12日に行われた第2回民衆総決起大会を発端として、毎週土曜日、17週間にわたって毎回100万人以上の市民がろうそくを持ってデモに参加したことで、3月末に当時の朴槿恵パク・クネ大統領が弾劾訴追され罷免が決定し、非暴力で政権を打倒した出来事のことを言います。

しかし、この集会在「第2回」と名付けられていることでおわりのように、これは実はそれ以前からの連続性のうえで起きた出来事でした。実際のろうそくデモの始まりは、2015年11月14日の第1回民衆総決起大会チョルラナムドにさかのぼります。この時、朝鮮半島南西部の全羅南道地方

から来てこのデモに参加した、70歳の^{ベク・ナムギ}白南基という農民の活動家が、放水銃を執拗に浴びせられて意識不明の重体に陥る事件があったのです。白氏は2016年9月に亡くなりました。さらに、2015年の末に朴槿恵政権と安倍政権との間で慰安婦問題を最終的かつ不可逆的に妥結するとの合意があり、それに抗議して2016年1月に一人の僧侶が焼身自殺する事件もありました。さらに遡ると、2014年4月16日にセウォル号事件があったわけですが、実はろうそくデモが行われたソウル中心街の^{クァンファムン}光化門広場一帯は、2014年からセウォル号の追悼や慰霊をしたり、遺族の方たちが籠城デモをする場となっていたのです。これらの大きな事件からのつながりと、追悼によるデモの空間という前史のうえに、2016年のろうそくデモを見ていかなければなりません。

藤野 ありがとうございます。香港の方はどうでしょうか。

伍 2014年に香港で発生した^{あまがさ}雨傘運動の経緯を紹介します。香港は1997年7月1日に中国大陸へ返還され、「一国二制度」の方針のもとに高度な自治権を持つことが認められました。いわば“ミニ憲法”に相当する「基本法」の第45条では、香港特別行政区政府の首長である「行政長官」は普通選挙によって選出されることが「最終目標」(ultimate aim)だと述べられています。しかし、1997年から2012年までの行政長官は、事実上、少人数で構成される選挙委員会という組織で選出されてきました。民主化運動支持者はこの選挙方法が基本法に違反すると批判して、「一人一票」の方法で行政長官を選ぶことを実現するために、返還後長らく民主化運動を行ってきました。

実際に、2007年の中国共産党全国人民代表大会(全人代)の決定で、2017年の香港行政長官選挙に普通選挙が導入される予定になりました。2014年には、政府の主導で選挙改革法案の議論が始まりました。しかし、同年8月31日に全人代の常務委員会は「八・三一決定」という方針を発表し、行政長官の候補擁立には1200人で構成される指名委員会の過半数の支持が必要であるとしました。この指名委員会は親中派が多数

派ですので、「八・三一決定」は事実上、中国政府が認めない人物、特に民主派の人を排除することを明示したものだんですね。中国政府の認許を得た2、3名の親中派の特定候補の中から、行政長官を香港人に選ばせることは、香港の民主化支持者にとって全く納得できない方案です。彼らは、この予備審査付きの案を「偽・普通選挙」であると批判し、大規模な反対運動を行いました。

その後の9月26日、学生リーダーである^{こうしほう}黄之峰（別名ジョシュア・ウォン、当時17歳）が抗議運動をしている最中、警察に逮捕されたことをきっかけに、香港市民の間で反対運動への同情・支持と政府に対する怒りが急拡大し、香港中心部の3か所を79日間（9月28日から12月15日）占拠する大規模抗議運動にまで発展しました。これが雨傘運動の経緯です。

宗教教団はデモに関わったか？

藤野 はい、ありがとうございます。ここから少し宗教との関わりについてお話ししていきたいと思います。

台湾のひまわり運動の場合は、そのリーダーの^{りんひはん}林飛帆が教会関係者だったので、台湾の長老教会は歴史的にも民主化運動に力を入れてきた教団でして、このひまわり運動にもかなり深く関与していました。たとえば事件が起きた3月18日当日に教会の関係者が記者会見を開きましたが、これは当然、その日に何か起きることをあらかじめ知っていなければいけないわけです。後から聞いた話では、デモ隊が国会に突入する際に、すぐ隣にある長老教会の壁を乗り越えて入ったと。実際、長老教会の牧師や聖歌隊などが、国会の中に入ってデモ隊を応援していましたし、会場のすぐ近くに臨時の礼拝所を作って毎週日曜日に礼拝を行ったり、その隣の長老教会ではテゼと呼ばれる祈りの会がこのデモのために毎晩行われたりしていました。

このように、デモに直接、宗教関係者が関わっているといったことがありましたら、教えていただきたいと思います。

真鍋 2015～16年のろうそくデモでは、あまり宗教者は前面に出ていません。実はかつての民主化闘争を牽引してきた、韓国で生まれた民衆神学を唱える左派プロテスタントは、現在かつてほどの勢力ではなくなくなってしまっていて。むしろ逆に、李明博政権（2007～11年）で台頭したニューライト勢力とともにプロテスタント右派が力を盛り返し、2014年のセウォル号事件以降、「セウォル号の遺族たちは地獄へ行け」とシュプレヒコールをあげるようなデモや集会を行ったりしています。朴槿恵政権が北朝鮮に対して非常に強硬な姿勢をとっていたので、相次ぐミサイル発射などいろいろとあったなかで、右派プロテスタントは韓国も核を持つべきだと集会やデモで主張していたということがあります。

ただ、宗教団体との直接の関わりではないのですが、先ほど述べた第1回民衆総決起大会の日に2015年11月14日が選ばれたのには、儒教的な規範意識が関わっていると考えられます。実は11月14日は朴正熙パク・チョンヒ（1963～1979年の大統領、朴槿恵の父）の誕生日なんです。1987年の民主化以降、「朴正熙の時代は軍事独裁だった」と否定的に見られるようになるなかで、2017年に朴正熙の生誕100周年を迎えるにあたり、朴槿恵は「朴正熙はやはり偉大な大韓民国の政治家であった」との歴史認識にもとづく新たな国定の歴史教科書を作ろうと動いていたわけです。これを宗教と言えるかどうかはわかりませんが、少なくとも昔ながらの儒教規範のなかでの、子が自分の親を顕彰する「孝」の1つの表



真鍋祐子（まなべ・ゆうこ）

東京大学東洋文化研究所教授。主な業績に『烈士の誕生—韓国の民衆運動における「恨」の力学』（平河出版社、1997年）、『増補・光州事件で読む現代韓国』（平凡社、2010年）、『自閉症者の魂の軌跡—東アジアの「余白」を生きる』（青灯社、2014年）など。

し方だと言えます。このように朴槿恵が自分の孝の問題に国を巻き込んで、民主国家としての歴史認識自体をひっくり返そうとしたところにも、人々の不満は向けられた。だからこそ、人々はわざわざこの朴正熙の誕生日にぶつける形で、デモを行ったのでしょうか。

もう1つ付け加えると、実はその前日の2015年11月13日も非常に重要な日でした。あとでまたお話ししますが、全泰壹^{チョン・テイル}という労働者が1970年11月13日に「労働者の生存権を保障せよ！」と叫んで焼身自殺をするという、韓国の民主化闘争の発端になる出来事を起こし、この日がちょうどその事件の45周年にあたっていたからです。これもやはり儒教規範に即して顕彰しようとする動きです。自らの体に火をつけて殺める行為は本来の儒教規範に反するのですが、これを価値逆転的に45周年で祀ろうというのは、逆説的には、儒教規範に準拠しているからということです。この2つの拮抗する動きを充分意識してこの11月14日が選ばれたんですね。

また、ろうそくデモのなかでは宗教団体は直接前面に出てきませんでした。やはり従来の宗教、特に聖書などのテキストに見られる、歴史的想像力が反復されるような場面がいくつもありました。その1つは2015年4月19日に、セウォル号の1周年のミサが行われたことです。セウォル号が沈んだのは2014年4月16日ですが、その1周年を4月19日に行ったのは、大学生たちが中心となり、1960年4月19日に李承晩の長期独裁政権を倒した四月革命をなぞっているんですね。このミサでは、韓完相^{ハン・ワンサン}という、民主化闘争のイデオログとして活躍した社会学者が、セウォル号事件は東学党以来の帝国主義列強による民族の受難と抵抗の伝統のうえに位置づけられると、またセウォル号事件は親日派¹⁾の朴槿恵とその背後にある植民地主義の構造のなかでみるべきだと演説したんですね。これは非常に韓国化されたキリスト教的な文脈です。たとえば出エジプト記の歴史が新約聖書「使徒行伝」のなかでペテロやステパノによって反復的に語られるように、過去を語ることで未来へのビジョンを語っていくような。

面白かったのは、この2016年の第2回民衆総決起大会の時に、

チョルラド
全羅道各地からの農民たちが、青瓦台せい が だい（大統領官邸）を目指して、高速道路を多数のトラクターを連ねて走ったことです。トラクターですから、当然ノロノロ走行です。そういうわけで、ソウルのインターを降りたところで警察に封鎖されて結局引き返さざるを得なかったんですが、このトラクター部隊が「全チョン 瑋ボン 準ジュン 闘争団」という幟を立ててソウルに進軍するんです。全瑋準は東学党の首班で、全羅道を中心に拡大した甲午農民戦争で処刑された人です。東学党の歴史になぞらえて自らトラクター部隊を走らせた。それは「五・一八光州抗争」に市民たちが自ら進軍していくイメージにも重なる。死ぬことがわかっていて、歴史的な出来事のイメージを自ら反復していく、そこに全羅道を共通項として、東学党やキリスト教の宗教的なコンテクストがあるということですね。

藤野 ありがとうございます、すごく勉強になりました。香港はどのようにか。

伍 まず雨傘運動は、キリスト教による運動ではないことは強調しないといけないのですが、一方でキリスト教的な要素が運動の中で多く見られるのが特徴的だと思います。

雨傘運動が発生する前の2013年、「オキュパイ・セントラル」という市民的不服従運動の計画が発表されました。金融街であるセントラルの占拠は、香港の経済・社会の安定と中国中央政府の名声に大きな影響を与える可能性があるため、中国政府は民主的な行政長官選挙法案を提示するだろうとの思惑から行われた計画発表でした。オキュパイ・セントラルの3人の発起人や中核の組織者のなかには、バプテスト派の朱耀明しゅうようめい牧師、香港大法学部の戴耀廷たいようてい（別名ベニー・タイ）副教授などの、熱心なプロテスタント信者もいました。運動の計画を発表する記者会見は「カオルーン・ユニオン・チャーチ」という教会堂で行われまして、十字架の前に座る3人が運動の理念について話した様子はとても印象的でした。また、運動の正式名は「愛と平和で中環を占拠する」（「佔領中環」運動）であって、キリスト教のイメージを反映するものが多いとされて

います。

また先ほども挙げた、雨傘運動で重要な役割を果たした学生リーダーの黄之鋒はクリスチャンの家庭に育ち、神の教えの影響で社会正義の追求の道を歩み始めたと彼自身が言っています。2017年、The Guardian紙で、黄は「私はクリスチャンであり、私が社会運動に参加するモチベーションは、(地の)塩と(世の)光になりたいからだ」と述べました²⁾。キリスト教の教えでは、塩と光は腐敗を防ぎ、道徳的な意味を持ちます。社会活動を続ける黄之鋒を支え続けてきた一つの力は、キリスト教の信念であったらうと思います。

さらに、「佔領中環」運動支持者のなかには、キリスト教関係者が多いです。たとえば、一部の牧師さんと信者たちが、2013年9月に「クリスチャンが民主政治制度改革に支持する理念書」という声明を発表しました。その中では「政府が〔民主化を求める市民の声に〕十分に対応しなければ、市民の非暴力かつ良心による不服従運動(英語: civil disobedience、中国語: 公民抗命)を理解・支持する」と宣言されました³⁾。

そして、運動期間中、警察がデモに参加した学生・市民を追い払う際に、多くの負傷者が出ました。プロテスタントとカトリックの主要な組織は相次いで声明を出しました。たとえば、中華基督教会香港区会は「強烈な非難及び呼びかけ」という声明文を発表し、警察の暴力を非難すると同時に、香港政府が香港市民の普通選挙という要求に応じることを強く要求しました。香港バプテスト連会も、「暴力行為を非難して、政府側と抗議者側の冷静さを求め、過激な行動を抑え、平和・理性的対話の門を開きなおすこと」を要求しました。

ただ、オキュパイ・セントラルや雨傘運動をめぐるのは、世論が分かれています。親政府派は運動の違法性を強調した一方、支持者は市民的不服従運動の正当性を強調しました。キリスト教のなかでも、神学の視座から信者はどこまで社会運動に参加すべきなのかといった問題をめぐると対立まで、今でも、キリスト教の組織者間では激しい議論がなされています。

藤野 ありがとうございます。各地それぞれの背景がありながら、広い意味での宗教的な関わりがなされていることがよくわかり、興味深いです。

この2010年代に起きたデモと宗教の関わりは、何もその時に始まったわけではありません。私の調査している台湾だと、1970年代当時、国民党の権威主義体制の中で戒厳令が敷かれ、自由に集会もできず、政治的な発言が厳しく取り締まられている時代において、長老教会が1971年に「国是声明」、1975年に「我々の呼びかけ」、1977年に「人權宣言」という3つの宣言を出します。当時、公にこういった発言をするというのはちょっと考えにくい時代でした。これによって長老教会はかなり圧力をかけられることになりませんが、政治に関心のある人達が、やりたくてもできなかったことを、キリスト教会が切り開いていったという事実、歴史があります。このバックボーンには当時の台湾（ないし中華民国）の独特な立場がありました。共産党と対峙しなければいけないので、自由な中国がここにいますよというスタンスを取らなくてはいけない一方で、政治的には自由に発言されては困るという、板挟みの状態。そのなかで長老教会にはキリスト教の国際的なネットワークがあるので、他の団体に先んじて一歩早く先鞭をつけることができたのです。

さらに1979年には美麗島事件（別名：高雄事件）^{びれいとう}が起きます。これは「党外」と呼ばれる人たちが起こした事件、デモですが、そこにも長老教会の人間がかなり関わっていた。その党外は今の与党である民進党につながっていくのですが、この1980年前後に長老教会と歩調を合わせていくという動きが起きてきました。

そういった背景をみると、今回のひまわり運動に教会が関わったこと、またその後の民進党の政権交代、さらにこの2期目の選挙で長老教会が民主党を応援したことは特に不思議なことでもなく、理由のあることですが、あまり知られていないんじゃないかなと思っております。

民主化運動とキリスト教的精神

藤野 司会者の期待としては、“韓国のろうそくデモではキリスト教徒が頑張った”という話が欲しかったんですが(笑)、いやそうではないというお答えでありつつも、しかしやはりこの儒教とか、キリスト教的精神がバックボーンにある。「光州518」の様な光州事件の映画を観たりすると、神父さんが出てきたりしますので、やはりキリスト教や宗教的なものと深く関係しているんだらうなど。さらに時代を戻ると、三・一独立運動のリーダーたちにもクリスチャンが多かったという話を聞いています。

真鍋 先ほどお話しいただいた、台湾では「自由中国」の建前があるという点では、韓国も置かれた状況は全く同じですね。それからやはり、キリスト教は世界的なネットワークがあるので、軍事政権も侮ることができなかった。これは軍事独裁政権時代以降、80年代90年代を通してのことですが、教会がある意味アジールの役割を担ったという点は、非常に重要なポイントです。映画『タクシー運転手』(2017)でも描かれた、ドイツ人記者のユルゲン・ヒンツペーターを韓国に行くように背中を押したのは、実はドイツ人のポール・シュナイスという牧師です。映画では、ヒンツペーターが宣教師と偽って入国審査をパスする場面がありました。このようにキリスト教は、公権力も手をつけてはならない領域だったわけです。

その当時、1973年の金大中^{キム・デジョン}の拉致事件がきっかけで日韓連帯運動の機運が生じて、岩波書店の雑誌『世界』でT.K生^{チ・ミョングァン}がいろいろ情報を集めて記事を書いていきます。このT.K生は池明観^{チョングァン}という方のペンネームでした。この人もクリスチャンで、2000年代に入ってからようやく名前が明かされました。この情報のやり取りはやはり教会が本拠地になっていた。警察権力なども入り込めない建前になっているので、教会にいろいろな情報が集まった。鍾路^{チヨング}のキリスト教会館の中に人権委員会など韓国NCC傘下のいろいろな組織が入居しています。それからカトリッ

クでは明洞聖堂が一種のアジールの役割をはたして、情報の交換や、人が逃げ込む場所となっていました。実際私もこういう研究をしているので、90年代半ばに「安企部」(情報機関である安全企画部の略称。現在の国家情報院の前身)という、日本で言えば公安のようなところから、突然刑事が宿泊先のホテルに押しかけてきたことがありました。気が動転して旧知の韓国人研究者に電話したら、とにかく教会に逃げると助言されて、3日間教会で潜伏したことがあるんですよ。こうした前提はおそらく台湾と共有されていると思います。

ところで、韓国民主化運動におけるデモの前史は19世紀末にまで遡ることができます。街頭示威の原型となる集会を最初に行ったのが、1896年に成立した独立協会という組織です。ご存知のように1894～5年に日清戦争があり、1895年4月に日清講和条約が結ばれて朝鮮は清国から独立し、それによって李氏王朝は大韓帝国に衣替えをするんですね。この大韓帝国の時代にできたのが独立協会で、それまでの清朝との朝貢関係、属国関係を断ち切り、独自に国を盛り立てていこうと、独立を慶祝する行事などを始めたわけです。それが街頭示威の原型になる集会の始まりだったと言われています⁴⁾。

韓国におけるデモの始まりは、三・一独立運動に帰することができます。これもなぜ3月1日だったのかというと、実はこの1919年の1月に、大韓帝国の皇帝であった高宗が死去し、3月3日に国葬を行う予定だったので、それに当ててこの3月1日が選ばれたのだそうです。ですので、大韓帝国の記憶と結びついてこの三・一運動が起こったわけですが、三・一運動の独立宣言文を起草した人たちは、やはりキリスト教や天道教の信徒たちが多かったので、非常に宗教的であると同時に、一方では王朝に対するある種の儒教的な追慕・顕彰の文脈もありました。

その後の、韓国のデモで大きなものだけ言いますと、先ほど言いました1960年4月19日に李承晩の長期独裁政権への反対デモが起こって、李承晩が下野するに至る四月革命です。このデモの発端は、一人の高校生が軍隊によって催涙弾を打ち込まれて殺されたことです。遺体が海に投棄され、その遺体が引き上げられたことがきっかけで、全国的にデモ

が広がりました。

その後に来るのが1970年11月13日の、これも先ほど言いましたが全泰壹の焼身自殺です。彼は一零細労働者ですが、労働基準法を遵守せよと訴える時に、やはり1960年の4月革命を見ていたからか、デモのやり方を大学生に教わりたかったと言い残しているんですね。彼の生き死に、彼が残した記録、そして彼自身プロテスタントの信者だったこともあって、なぜ自身に火をつけようと思うに至ったかという、彼自身の中の死に向かう経緯。そしてその後、彼の死をどのように受け止めていったか、生者の側の受け止め方にも、やはりキリスト教的な文脈があったと言えます。殉教者で、かつ彼がデモのやり方を学生に教わりたかったと書いていたことで、彼の死を聞きつけたソウル大生たちが霊安室を訪ねてきて、そこで葬儀デモをやろうとします。結局警察によって阻止されて未遂に終わりますが、これは三・一運動、四月革命から引き継がれた「弔い合戦としてのデモ」といえるでしょう。

この60年と70年の間に何があったかという、プロテスタントは都市部の零細工場の工具などを対象に、カトリックは主に農村に入り、宣教をしがてら、文字を教えがてら、何らかの社会科学的な教育を行うことによって、自らがおかれた状況を相対化し、そして社会変革に結びつくよう意識化を促す。このように労働者たちに社会運動を意識化させていく働きを、60年代からすでにプロテスタント・カトリックともに行っています。全泰壹の運動もそこから出てきているんです。

続く1980年の光州事件も、学生運動に由来する部分がある一方で、やはり最後まで残って戦った人たちは、カトリック教会で行われていた労働夜学で、読み書きに始まり社会科学的知識を学んだ労働者や、そこで教師をしていた大学生、その卒業生といった人達が光州での闘いの中核をなしていた。もちろんYMCAも1つの拠点になっていました。

そして光州事件の後に来るのが1987年の6月抗争。日本では2018年に『1987、ある闘いの真実』という映画が公開され、ご覧になった方もいらっしゃると思います。この1987年6月抗争のきっかけは、延世大学ヨONSEの李韓烈イ・ハンニョルという学生が催涙弾を受けて亡くなるという出来事でした

が、彼の葬儀で初めて「民主国民葬」という新たな葬礼の形が作られました。そのなかで、ソウル大学舞踊学科の李愛珠教授が、シャーマンの舞に着想を得た独自の、烈士復活の儀礼をするんですね。これまでの運動で、焼身自殺や、アカのレッテルを貼られ殺された人たちは皆、儒教的規範からは逸脱しているわけですが、これをあえて転覆させて、国葬に対抗する形での葬儀として生み出されたのが民主国民葬です。本来、若くして非業の死を遂げた未婚者に対しては儒教式の葬礼がなされず、墓も造られないことになっていて、そういう死者はそのまま土に埋められたり、火葬した骨片を砕いて川や野山に撒かれたりして、あとは崇り鎮めのためにシャーマン儀礼によって慰撫されるだけでした。ところが民主国民葬は儒教式葬礼を換骨奪胎し、死者の母校や職場でキリスト教やシャーマニズムの儀礼を取り入れた「永訣式」を行った後、靈柩行列を中心地となるロータリーなどに向かわせて、そこで「路祭」を行うことで死の意味を広く社会化します。その後、靈柩行列は死者を野辺送りするように墓地へと向かいます。ソウル近郊のモラン公園や光州の望月洞墓地など、民主化運動の犠牲者を一人一人土葬する墓域があるのです。李韓烈の民主国民葬では、現在のソウル広場から光化門にかけて、吊い合戦の白衣のデモ隊と群衆で埋め尽くされました。このように儒教的な形式を踏襲しながらも、そのオルタナティブとして死を意味づけ、死からの再生を語る文脈の中にキリスト教やシャーマニズムの要素が埋め込まれたのです。特にキリスト教が内包する預言者的な言葉の力は、人々の中に社会変革への強い意志を鼓舞しえたといえるでしょう。儒教批判に対する価値逆転的な、そして同時に非常にシャーマニズムのコンテクストにも結びついた形で、さらには6月抗争の時には、カトリック・プロテスタント両方の宗教勢力が民主化宣言を引き出すまでにかなり大きな力を発揮しました。やはり、アジールとしての教会は、権力の踏み込めないところで、権力に追われた人々や真相を握る人々をかくまい、そこで真相が明かされる、非常に重要な意味を持っています。

その後、2002年6月に、ろうそくデモの原型になる運動が起きます。ちょうど「赤い悪魔」と呼ばれた韓国サポーターたちがソウル広場を埋

め尽くした日韓共催ワールドカップのさなか、米軍の装甲車が2人の女子中学生をはねて死なせる事件があり、このときに人々はすぐさま、そのソウル広場に雲集してろうそくを持ってデモを始めた。実は光州事件があった5月18日の前の5月14日に、民主大聖会と称する集会を独自に光州の人たちがやっていて、その時に松明たいまつを持ってデモ行進したんですが、おそらくイメージとしてはそこから来ていると思います。「デジタル・デモクラシー」と呼ばれるのですが、このろうそくデモは2002年6月以降にさかんになり、その年の暮れの大統領選挙まで及び、その結果盧武鉉ノ・ムヒョンが大統領に選出される流れになります。

長々とお話ししてきたことをまとめますと、特徴は弔い合戦ということですね。儒教規範に対する価値逆転的な意味合いをもって、その死を祀り上げて民主化闘争に展開させていく。韓国のデモは、高宗の国葬以来、ろうそく集会でも、セウォル号の惨事でも、「死にどう応答するか」を問う形ですと貫かれてきているのではないかと見ています。

藤野 追悼の話に関しては後半でもまた教えてください。

今お話を伺って、台湾と韓国はすごく似ているなと思いました。たとえば済州島四・三事件は1948年ですよ。その前年の1947年には、台湾で二・二八事件が起こっています。先ほど申しましたが、台湾では1979年12月に美麗島事件があり、その半年後ぐらいの1980年5月18日に韓国の光州事件がありました。また、1987年に韓国のデモがあったその同じ年に、台湾では戒厳令が解除され、2000年には政権交代が起こり陳水扁ちんすいへん政権が成立する。それぞれ別に動いているはずなんですが、同じ頃に同じような事件がある。今まで、戦後の民主化運動を台湾と韓国で比較しながら考えることは、あまりなされてこなかったもので、今後の課題になっていくと思いました。

香港については、返還前は少し事情が違うのでデモの歴史はないと思うのですが、とはいえやはりそれなりの社会的な背景、文脈があると思いますので、デモと宗教に関係する政策、黄之鋒があれほど宗教的バックグラウンドを背負って立ち上がらなければいけなかった、その背景を

伍先生に教えていただければと思っております。

伍 少し別の視点から見ていきたいと思っています。

香港の社会運動とキリスト教との関係を考える際に、キリスト教が社会との関わりをどう見ているのかを理解しなければならないと思います。これまで、香港のキリスト教会や神学者たちは、宣教と社会との関係性をめぐり長い議論を重ねてきました。

この議論は、3つの説に大別できると考えられています。1つ目は結果論を強調し、神の教えが多くの人に広がれば、社会では隣人愛が自然に形成されるという前提で、こうした理想的な世界では、人々が自然に互いに愛し、支えあうから、社会変革を促す運動を起こす必要がないと。そのため、教会は社会的政治的参加より、宣教に力を入れるべきだという説です。2つ目の説は、社会参加が宣教の手段だという立場で、これは主にキリスト教原理主義・福音派に擁護されています。社会参加は価値があると認められるが、宣教という目的を前提にすべきだとしています。3つ目の説は社会福祉が宣教の「パートナー」であると理解していて、まさに「ローザンヌ誓約」で唱えられた「伝道」と「社会参加」が宣教活動の「両輪」だという考え方と一致しています。したがって、貧困者の支援・正義の追求などの社会責任を負うことは、福音を広げることと同じく教会の「インテグラル・ミッション」の一部であるとします。

この3つの説のどれが最も適切とされるかについては、宗派によって



伍 嘉誠 (ご・かせい)

北海道大学大学院文学研究院准教授。主な業績に「香港の基督教と雨傘運動」(櫻井義秀編著『中国・台湾・香港の現代宗教—政教関係と宗教政策』明石書店、2020年)、“Rethinking the Political Participation of Hong Kong Christians” (Social Transformations in Chinese Societies, 2017, Emerald Literati Awards 2018 Highly Commended Paper受賞) など。

判断が異なりますが、香港の主流教会は第2バチカン公会議、解放の神学、およびローザヌ誓約の影響を受けて、社会参加を「宣教の一部」（第3の説）、あるいは少なくとも「宣教の手段」（第2の説）として理解して、価値あるものと認めています。ですから、香港の多くの教会は、社会救済・福祉を組織的な目標の一部としています。

一方で、香港の神学研究者である龔立人^{クン・ラブケン}は、香港の教会による社会参加は多く見られるが、それらの活動は「予防型」と「解決型」の性格が強いと指摘しています。つまり、社会問題の発生を予防する、あるいはすでに発生した問題を解決しようとする方針に偏っているので、社会をよりよく変革するという視点からの教会自身の役割理解は希薄でありまして、「革新型」志向が弱いと指摘されています⁵⁾。こうした指摘から、香港の教会の社会的政治的参加は「予防型」「解決型」志向の社会福祉活動にとどまることが多く、「革新型」志向の社会運動に参加する教団・信者は存在しますが、主流ではなかったと見て取れます。

しかしながら、返還後の香港においては、行政長官の選挙制度民主化をめぐる議論が続いていて、その実現を求めるための運動も盛んであります。こうしたなかで、香港のキリスト教も様々な形で民主化運動と関わるようになってきています。たとえば、カトリック教会の「正義と平和委員会」や、プロテスタント教会の統合組織である「香港キリスト教協進会」は、民主化を求める声明や活動を多く行っています。また、2003年に香港政府が「基本法第23条」（通称「国家安全条例」）を可決しようとした際には、多くの市民が香港の自由が覆されることを懸念して、返還記念日である7月1日にデモを行いました。最終的に50万人が参加したデモの結果、条例制定は撤回されました。その後、香港大学が実施した世論調査によると、40%以上の人々が「宗教者の呼びかけ」がこのデモへの参加にとって「とても重要」もしくは「重要」であったと回答しています。宗教者のカリスマ性が、社会活動への動員に対して重要な影響を有するものであることが示唆されています。

それ以降、毎年7月1日に香港市民は「7・1デモ」と呼ばれる民主化要求デモを行うようになりました。2004年から2007年の7・1デモに

表1 「7・1デモ」の参加者(宗教別)

| | 2004 | | 2005 | | 2006 | | 2007 | |
|---------|------|-------|------|-------|------|-------|------|-------|
| | 人数 | % | 人数 | % | 人数 | % | 人数 | % |
| プロテスタント | 119 | 21.1 | 85 | 16.0 | 103 | 16.4 | 115 | 21.2 |
| カトリック | 54 | 9.6 | 43 | 8.1 | 42 | 6.7 | 39 | 7.2 |
| 仏教 | 25 | 4.4 | 28 | 5.3 | 45 | 7.2 | 24 | 4.4 |
| 道教 | 3 | 0.5 | 3 | 0.6 | 1 | 0.2 | 2 | 0.4 |
| 無神論 | 6 | 1.1 | 11 | 2.1 | 3 | 0.5 | 32 | 5.9 |
| 無宗教 | 349 | 61.9 | 354 | 66.8 | 428 | 68.0 | 308 | 56.7 |
| その他 | 9 | 1.6 | 6 | 1.1 | 7 | 1.1 | 23 | 4.2 |
| 計 | 564 | 100.0 | 530 | 100.0 | 629 | 100.0 | 543 | 100.0 |

出典：Public Opinion Programme (2005-2007)⁶⁾により作成

において実施された調査によると、デモ参加者におけるキリスト教信者の割合は、仏教・道教信者の割合よりも高く、毎年20%以上を占めています(表1)。平信者レベルにおいても社会的政治的活動に活発に参加している傾向が見られます。

追悼儀礼としてのデモ

藤野 お二人ともありがとうございます。

ここまでは「デモに宗教がどう関わったのか」でしたが、ここからは「デモ自体に宗教的・儀礼的な側面があるか」について話をしていきたいと思います。先ほどからすでに追悼や儀礼的側面の指摘は出てきていますが、同じ主張を持った人たちが同じ場所に大人数集まる、そして多くの人が同じルートを、デモ行進として巡礼的にぐるりと回って元の場所に帰ってくる、大きな声を出す、時にはテーマ曲が設定され、みんなで歌って一体感を得る。特に宗教教団が関わらなかつたとしても、そこに宗教的な充足感に似たようなものが生じるということは、心理学者ではないので証明はできませんが、あると思います。たとえば国家的な追悼儀式も行われますし、各地の二・二八記念塔のようなところでも儀式や儀礼が行われます。

台湾の事例で1つ紹介したいのは、美麗島事件の連続として起きた「林家事件」です。美麗島事件で逮捕された林義雄（弁護士、台湾省議員）という人物がいて、彼は政治犯として捕まっているので彼の家も24時間の監視下にあったのですが、家に侵入した何者かによって林義雄の母と双子の娘が殺された事件です。監視されているにもかかわらず、白昼堂々殺人が行われ、逮捕者が出ないどころか目撃情報の1つも出てこない。おそらく国家による白色テロと目されています。その家を林さんが売りに出したところ、「その家を購入すると国家に反発すると見られそうで怖い」ということで、誰も買わなかった。ところがその家を——マンションの1階のようなところですが——教会が買い上げて、「義光教会」という教会を作りました。今も教会として使われていて、民主化運動の聖地の1つになっています。その林家事件が起きたのが2月28日なんですね。これは当然、台湾に住む人にとっては二・二八事件を思わせる、国家の強い力を連想させる日に起きたので、義光教会では毎年2月28日に追悼礼拝を行い、そこに民進党関係のかかなりの大物も参列します。僕はそこで蔡英文に会ったことがあります。

宗教が追悼を行うパターンと、一方で自然発生的に追悼せざるをえないというような、この両方の動きが起きてきていると思うんですね。香港ではデモに関連する追悼はどのぐらい行われていたのでしょうか。

伍 反逃亡犯条例改正運動のなかで、一般の人々が自発的に追悼イベントを行った例は多くあります。たとえば、横断幕を掲げた抗議行動の最中に35歳の男性が転落して亡くなった事件がありました。また、警官らが強制排除を行っていた最中に、港科技大學学生だった周梓樂さん（当時22歳）が、建物の高層階から低層階に転落して死亡した事件があります。今でも、彼らは定期的に記念、追悼されていて、時には香港民主化運動の「烈士」として崇拜されることもあります。

また、8月31日にプリンスエドワード駅構内で発生した衝突で、警察の暴力によって多くの死者が出たのではないかと、確実な証拠はないのですが、多くの市民が強く疑っています。その後、多くの市民が定期

的に、駅の入り口付近に集まり、駅構内で亡くなった人のために追悼イベントを行っています。多くの市民は、駅の入り口付近で、列に並んで、花をささげたり、祈祷したりします。

それ以外にも、運動期間中に、原因不明の死者が多く出ていることが注目され、報道されました。デモ支持派は、それらの死者は警察の暴力によって亡くなったのではないかと強く懸念しています。運動期間中に理由不明で亡くなった人たちは、多くの市民から運動の犠牲者とみなされ、追悼の対象となっています。

これには、実は大きな意義があると思います。現在の香港では、コロナ感染対策や、2020年に成立した「国家安全法」の影響で、デモ活動がなかなかできません。しかし、市民が自発的に死者を追悼するような儀礼は、現在の法律では警察の取り締まりの対象となりません。ですから、デモ自体はできないのですが、一部の市民は、法律を破らない範囲で、運動中に亡くなった人を追悼するという、より日常生活に近い形で、市民的不服従的な運動を続けることによって、運動の初心を常に忘れないようにしていると言えるでしょう。ここから、運動支持者のレジリエンスを強く感じます⁷⁾。

藤野 ありがとうございます。韓国の方はいかがでしょうか。

真鍋 先ほど、すでに儀礼についてはお話ししてしまいましたが、ろうそくデモの場面におけるとても興味深い儀礼を1つ紹介したいと思います。

先ほど言いました、2015年に放水銃で集中砲火を浴びて2016年9月に亡くなった白南基氏の葬儀は、わざわざこの第2回民主総決起大会——この大会は11月だったんですけれども——と同日に行われています。白氏の霊柩行列が青瓦台に向かっていくのと同時並行的に、実は朴槿恵の独裁的・縁故主義的・権威主義的な政治の死を宣告する意味で、「朴槿恵の霊柩行列」というものも作られて青瓦台に向かったんです。韓国では為政者の藁人形を作って焼き払うことを儀礼的によく行っており、また1970年には全泰壹が「勤労基準法なんかあっても、守られな

いんだったら、そんなものは火刑に処してしまおう」と言って、勤労基準法の本を抱き自分の身もろとも火をつけて焼身自殺をしてしまう事件がありました。しかし霊柩行列は初めて見ましたね。

ろうそくデモは非暴力を貫き、死者は出ませんでした。例外は、この白氏と慰安婦問題の日韓妥結に抗議して焼身した僧侶の2人だけで、非常に平和的な、文化的なものを前面に出していました。かつてのような投石や火炎瓶を伴う激しいやり方とは全く違って、たとえば特設ステージの上でミュージカル俳優が歌を歌ったり、著名な運動歌謡の歌手がコンサートをやったり、舞踊をやったり。その源流は光州での出来事を表現した「五月文化」に遡ります。1988年に、国会聴聞会で初めて光州のことが公に取り上げられたのですが、それまでは光州事件は無かったことにされ、文字にするとか、何らかの形で表現すること自体が、口を塞がれていた状況でした。ですので、光州を経験した人たちは、その出来事をさまざまなアートの形態で表象していたんですね。演劇や民衆歌謡、民衆美術、漫画、文学といったいろいろなジャンルにわたって光州を語る、そういうものを一括して「五月文化」と総称するんです。惨劇からしばらく時がたって、語り手自身のトラウマが少しずつ昇華されるに伴って、洗練された形でようやく表に出てきたものです。

これは後からお話しますがけれども、あの大変有名な光州の民衆歌謡をはじめ、集会でそういった五月文化を共にすることというのは、同時にあの五・一八オーイルバル（1980年5月18日に勃発した光州事件のこと）、それに続く1987年の6月抗争も含めて、民族の抵抗の歴史を想起させる、そうした儀礼的な意味合いがあったのかなと思います。

場所性という点についても、ろうそくデモのかたわらで、2014年以降セウォル号の追悼空間が作られたり、また2016年7月に日本の相模原市で起きた津久井やまゆり園の事件の際には、韓国の障害者団体が祭壇を作って追悼行事が行われたりしました。つまり、その場所自体が、デモの場所であると同時に、民主化闘争の枠を超えて広い意味での追悼の空間になっているのが特徴かなと思います。

通過儀礼としてのデモ

藤野 儀礼にはさまざまな側面があり、全てをここで扱うことはできませんが、注目したい儀礼の側面として、通過儀礼によく見られる「儀礼を通じて局面が変わっていく」ことがあります。成人式を行うと子供から大人になるように。仮にデモを儀礼と捉えるのであれば、儀礼を行うことによって、デモの参加者たちは今の体制から次の体制に向かって行くというようにも考えられます。これは宗教教団とはほとんど関係なく、人間が昔から古今東西でやってきた儀礼の意味ですよ。過程を通して次へ移っていく側面が見られます。

台湾の場合では、当初は民主化や自由・人権の要求だったのが、途中から「我々は中国ではなく台湾である」という、自由や人権とは少し異なったアイデンティティの問題、ナショナリズム的なものも入ってくるところがありました。そう考えると一つの同じ儀礼にみんなが参加しているとはいえ、何か見ている場所は少しずつ違う、多様性があるのかなと少し考えております。伍先生どうでしょうか。

伍 藤野先生がおっしゃったとおり、儀礼は今の状況から次の状況へと変化を求める機能をはたしていると思いますね。たとえば雨乞いは、干ばつが続いた際に雨を降らせるために行う呪術的・宗教的な儀礼のことです。ですから、あまりよくない現状から、望ましい社会のあり方や政治体制へと社会を変えていくために、社会運動としての儀礼が行われるのではないかと考えられます。香港の民主化運動の参加者にとっての望ましい社会とは、真の普通選挙が実現した社会です。その望ましい社会の状態を達成するために、社会運動という変化を起こす儀礼が必要だと、運動支持者は考えているのではないかと思います。

ちなみに、雨傘運動に参加することによって、自分のなかにも大きな変化が起こったと、参加者からよく聞きます。たとえば、昔に比べて社会的関心が高まったとか。また、参加こそしませんでした。参加者の様子を見て、それをきっかけとしてより政治的に熱心になったり、雨傘

運動以降の社会運動に積極的に関わっていくようになったという人もいるようです。この意味で雨傘運動は、一つのイニシエーション、通過儀礼のように、政治・社会への参加のドアを開いてくれる重要なものです。

そして、もう一つ意味深いと思ったのは、元香港中文大学哲学部教授 Chan-fai Cheung 先生の指摘です。彼は雨傘運動の時に「占拠地がユートピア的な場所に変化した」と感じたそうです。彼は、占拠地にはそれなりの秩序があって、参加者が自発的に掃除したり、管理したり、何かあったときにできるだけみんなで議論して決定するような民主的な一面もあることに、非常に感銘を受けたと言います。こうしたユートピア的な空間のなかで、参加者はお互いに助け合って、運動のために自分にできることをします。そして、一緒に自由のために、民主のために、頑張りましょうという経験をした市民たちは、一つの香港共同体のような意識を共有するようになったと考えられます。つまり、雨傘運動のような大きな社会運動を経験した香港人は、みんなで一つの儀礼に参加したかのように、自分の中である種の「香港アイデンティティ」が構築されたのではないかと思われます。

藤野 ありがとうございます、あいまいな質問の意図をきちんと汲み取っていただきました。真鍋先生、どうですか。

真鍋 そうですね、このろうそくデモという出来事そのものが、新たな局面への移行という、非常に大きな経験になったと私は思っております。1980年代以降の運動はよく「1987年フレーム」とか「1987年体制」という言葉で表現されるのですが、光州事件や、1987年のソウル大生が水拷問で亡くなった事件や李韓烈事件など、非業の死に対する反作用で運動が展開されてきました。そのため、当時の民主化闘争では、4月と5月に抗議の自殺者が多いんですよ。四・一九学生革命の記念日にその精神継承として民主化のデモが行われ、それが5月18日まで続く。そうしたデモは激化して、たとえば機動隊に取り囲まれて圧死したり、

殴り殺されるなど、突発的な事故も起こりやすくなり、さらに抗議の自殺が続く。この「1987年フレーム」に準拠した運動は非常に暴力的であり、マッチョだったと言えると思います。

しかし、2016年のろうそくデモでは完全に転換しました。これは一つには、今言ったようにかつて1980年代あたりの民主化運動といえば、火炎瓶を投げたり石を投げたり、抗議の焼身自殺をしたりというものでしたが、その過激さゆえに民心が離れていったことを、当事者たちが学習したことが一番大きいです。今回はなるべくそういうことを出さないよう心がけていた。また民主化後初の大統領選挙で進歩派が分裂し、軍人出身の盧泰愚に漁夫の利をとられるという痛い経験をしたことで、たとえ自分たちと相容れない考えの持ち主でも、そこは一度目をつぶろうとの意識が働いたようです。

ですから、同じ儀礼に参加していても何か見ている方向が違っていると、先ほど藤野さんがおっしゃいましたが、確かにたとえば朴槿恵退陣のデモのなかをみると、もちろん民主化という題目を唱える人もいれば、^{チェ・スンシル}崔順実の問題をとりあげて縁故主義をけしからんと言う人もいるし、あるいはミソジニストで「女の大統領はけしからん」と、本当に聞くに堪えない女性への侮蔑的な言葉でシュプレヒコールを叫ぶ一団もいたらしい。しかし、それについては鼻をつまんで必死に我慢を重ねて、最終的には朴槿恵の支持率を1%にまで持って行って引きずり降ろした。この出来事によって、彼らはコミュニタスを肌身で経験したでしょうし、それによる成功体験を確実に一つ掴んだ。デモ集会への非常に強い自信を持ったような気が私はします⁸⁾。

そして、^{ムン・ジェイン}文在寅が大統領に当選した後に、あの^{チョ・グク}曹国問題が起きましたよね。その時に二つのデモが行われたわけです。一つは、検察改革を求めて曹国を守護する立場。それは主に旧来の学生運動を引っ張ってきたような人たちを中心とした、検察庁前でのデモ。もう一つは、曹国は熱心に民主化運動にコミットしていたとはいえ、実は経済的に非常に恵まれた階級の人だったという部分で、やはり階級闘争に向かう人たち、という二つに分かれたんですね。その時、デモに行くこと自体の敷居も

低くなり、非暴力でどうやってデモをすれば効果的なのかをそれぞれが学習して、スタイルができてきたのかなと思いました。

当時、ある左派の活動家で政治家でもある知人が言っていたのですが、今は文在寅も支持率が下がって、また右派が盛り返っていて、次の大統領選挙がどうなるか読めない状態になっているけれど、たとえ次の大統領が右派になっても大丈夫だと確信していると言うんですね。ろうそくデモを経験したことで、流血を交えずに権力と闘う方法を会得できたので、次の大統領が意に添わなければまた同じようにコミュニタスを作って、自分と相容れない者たちともとりあえず一緒にやればよい、という自信がついてきた。これは日本から見たら大変羨ましい状況かな、と。

藤野 ありがとうございます。東アジアで共通点もありながら、それでいてやはり各地の違いも今、浮き彫りになってきて、興味が尽きないです。

デモのアイコンとなる死者／リーダー

真鍋 それに伴って、儀礼におけるアイコンという論点もあると思うのです。韓国の場合はやはり、アイコンになるのは死者なんです。生きているリーダーがアイコンになるケースは、金大中を除いては韓国ではあまり私は見た覚えがなくて、たいていの場合、死んだ後になるんです。盧武鉉もそうだと思うんですけども。しかし、そうした死者を前面に立てる感覚も、ろうそくデモをとおして、あえて白南基氏の遺影などを前面に立てずとも政権交代に成功したことで、乗り越えられてきているような気がいたします。

藤野 アイコンとなる死者という考えは、韓国では確かにそうですね。台湾では、李登輝^{りとうき}や陳水扁、蔡英文、もしくは陳菊^{ちんきく}（前高雄市長）などは、かなり人気のある政治家で、民主化のリーダーとして注目されていますが、死者を掲げてというのはあまり見ない気がします。今後、たと

えば李登輝がそうになっていくかもしれないですが、ちょっとわかりませんね。

香港のリーダー、アイコンについてはどうですか。周庭（別名アグネス・チョウ）は日本ではすごく人気がありますが、香港の事情とは少し何かズレているんじゃないかなという気もしますが。

伍 そうですね、香港では、民主派のリーダーといってまずアグネスが出てくるということはないと思いますね（笑）。少し前の人で、もう亡くなった方ですが、司徒華は香港だけではなく欧米でも人気があります。アグネスはなぜか日本で大変人気を博して、「民主の女神」と呼ばれるようになっていきますね。最近、その言葉が日本から香港に逆輸入されて、香港でも彼女のことを「民主の女神」と呼び始めましたが。民主派だけではなく、さまざまな運動で「民主の女神」と呼ばれる人物がよく登場します。人物ではなくて方法のほうが、「民主の女神」のイメージが強いですね。香港の人にとってこの言い方が良いかどうかわかりませんが、民主という理念、あるいは民主化を求める運動が、一つの宗教として多くの香港市民に崇められる存在になっているのではないかと思うこともあります。

藤野 アグネス・チョウが日本で人気を博し、どこかのメディアが「民主の女神」という言葉を作って、それが香港にも伝わっていく現象は、彼女が、ルッキズム的な意味で、美人だった、そしてかなり流暢な日本語で涙ながらに訴える姿は、日本のテレビやインターネットの視聴者に、応援させ、香港の側に立つ感情にさせるのに十分な、まさにアイコンであったと言えます。女性で可愛いからと持ち上げられることには違和感もありますが、一方で国際的な連帯が必要な民主化運動などでは、世界各地に向けて、たとえば日本語ができるならば対日本のスポークスマンになるというのは、戦略としてはありえるとも思います。

民主化運動における世界的な連帯の動き

藤野 最後に世界的な連帯について話したいと思っています。台湾でも、先程もお話したように、キリスト教のネットワークがあるからこそ民主化運動の先鞭をつけられた。また光州事件でも、映画『タクシー運転手』で見られるように、情報を外に出すことを命賭けでやっていた時代があった。それによってある情報が韓国よりも先に日本の新聞に書かれたといった話も、当時聞きました。

新型コロナの時代を迎えた今、我々は新しいメディア環境に置かれています。今回のこの対談も、まさかZoomを使って東京と北海道で行うとは、2、3年前には全く想像がつかなかった現象だと思います。2010年のチュニジアのジャスミン革命あたりからかと思うのですが、民主化運動に新しいメディアを、当時は携帯電話でしょうか、使って大きなうねりを作っていくことが注目されるようになりました。

台湾のひまわり学生運動などもまさにそうです。私が最近メディアに関心を持つようになったのは、そのひまわり学生運動の時の印象が忘れられないからです。ひまわり学生運動が起きた際、すぐにでも現場に駆



右上：藤野陽平（ふじの・ようへい 司会） 北海道大学大学院メディア・コミュニケーション研究院准教授。主な業績に『台湾における民衆キリスト教の人類学 ―社会的文脈と癒しの実践』（2013年風響社）など。

けつけたかったんですが、なかなかすぐに動けず悶々としていたところ、Facebookを通じて新聞やテレビよりも早い情報が、しかも日本語で入ってくる。今までの人類学はこういう新しいものは使わなくていいと思っていたけれども、これはちょっと避けて通れないぞと、そしてこれが新しい連帯を作っていると気づきました。香港と台湾は言語も通じやすいですし、中国という大きなものに相對しているという意味でも、連帯がしやすかった。そしてそれはインターネット無しではもはや成立し得ない。

このように、もともと東アジアの連帯をベースとして国際的なネットワークがあり、さらに新しいメディアを通じた連帯が生まれていることについて、どうですか、真鍋先生。

真鍋 メディア以前の連帯の話に少し戻ってしまいますが、先ほど藤野さんが台湾と韓国とでシンクロシティがあるとご指摘されたと思います。私はあまり台湾は念頭になかったのですが、80年代に韓国ではよく「民主化ドミノ」ということが言われました。フィリピンやタイなどの国々の民主化運動が、実は相互に影響し合っているという意味です。韓国の影響をフィリピンやタイが受け、そしてフィリピンでマルコス政権が倒れ、そのフィリピンの2月「革命」の情報が今度は韓国に入り、韓国の6月抗争を後押しし、といった関係性です。もともとは、やはりクリスチ안의ネットワークで情報の授受がなされていたということがあり、香港とか、東京の西早稲田にあるNCC（日本キリスト教協議会）とか、より世界的規模で言うとベルリンやメキシコシティが、実は韓国民主化運動を側面支援していて、連帯するネットワークの拠点になっていたことが非常に重要です。特に70年代は、メキシコシティを拠点としたラテンアメリカ各国の軍事独裁政権からの亡命知識人たちの間で、^{キム・ジハ}金芝河救済運動が積極的になされたという、これが前段になります。ですからもともと、メディアが介在する以前から、クリスチ안의ネットワークを通じて地域を超えた連帯があったのです。

今日私がお話しようと思って準備してきたのは、民衆歌謡の伝播という話です。韓国では70年代半ば頃から、運動歌謡が歌われるようにな

りました。最初は替え歌からです。朝鮮戦争の時の軍歌や、アメリカの南北戦争の時に歌われた歌や、讚美歌に、即興的に歌詞をのせていく。また70年代半ばに、歌手でカトリック信者の金珉基キム・ミンギが、「金冠のイエス」、「主よ今ここに」などの民衆歌謡をいくつも作っています。そのなかでも、今アジア各国に広く伝播して歌われている、「ニムのための行進曲」(英語名: **Marching for the Beloved**) という歌があります。「ニム」という韓国語は、日本語では「あなた」としか訳しようがないのですが、第二人称の意味にとどまりません。擬人化された何か愛すべき存在というか、たとえばそれは時に祖国であったり、不特定多数の何かであったりとか、非常につかみどころのないものなのですが。光州事件の後、光州の出来事を叙事詩的に語り伝える歌をひそかに作っては録音していた集団がいて、1981年に「魂をときほぐす」という意味の「ノップリ」と名付けられた、一連の歌曲のような形式の作品のカセットテープが作られました。そこに収められた1曲が「ニムのための行進曲」です。これは全くオリジナルで作られた歌なんですね。この「ノップリ」というテープはもともと、光州で、市民軍として最後まで戦って亡くなった一人の男性と、1978年に練炭中毒死した、彼と一緒に夜学活動をやっていた女性との死後結婚式が、1982年2月に行われることになり、そこで披露するために作られたもので、これがいつしか全国の学生街に広がるわけですね。カセットテープは複製可能ですので、今のインターネットほどの広がり方ではないですが、それでもどんどん全国に伝わった。この歌詞の中で「先に立って私は行く、生者よ続け」という決めゼリフがありますが、何かそこにも非常にキリスト教的というか、殉教者的なニュアンスが含まれているように思います。

そして、この歌はさらにアジアへと広がっていきます。そのきっかけは、アンジェラ・ウォン (Angela Wong) という香港の活動家で、今は香港中文大学の教授をなさっている方が、1982年に Hong Kong's Christian Student Association という団体の代表として韓国を訪れた際、民主化運動の前衛に立っていた KSCF (Korea Student Christian Federation) という団体との交流プログラムで、韓国の若者たちが繰り

返しこの歌を歌う場面に出会ったことでした。彼女はそれにインスパイアされて、帰国後の1984年に、その歌詞を自分で翻訳して同胞たちと歌い始めた。それがきっかけで、まず香港でこの歌が広まった。そしてどうやら台湾にも、労働運動も含めて、やはりクリスチャン同士のネットワークや交流プログラムを通して、1989年までには伝わったそうです。この香港バージョンが、実は同じメロディで、おそらく中国共産党からは逸脱した側の農民工支援の活動家たちがメロディだけを受け入れて、歌詞を新たに作って「労働者たちの愛国歌」という題で歌っている⁹⁾。

さらにこの「ニムのための行進曲」は、カンボジア、マレーシア、タイ、インドネシアにまで広がっていきます。実は国軍によるクーデター後のミャンマーでも歌われているのを、私はYouTubeで見てもびっくりしたんです。どういう伝わり方をしたのかはわかりませんが。

実は2000年以降ですね、光州が自らを人権の聖地としてセルフ・ブランディングをするようになり、アジア各国の活動家と連帯し、彼らを支援し、毎年「光州人権賞」の表彰を行うようになったのです。このように人権思想をアジア各国に輸出するような活動を始めたことで、アジア諸国の活動家とのパイプが非常に太いものになっているんですね。

一方で、これもYouTubeで流れてきてたいへん驚いたのは、ミャンマー国軍の歌がなんと日本の軍艦マーチと同じメロディだったことです。どうやらアウンサンスーチーの父がミャンマー国軍を作ったときに、大日本帝国陸軍から支援を受けたとか、そういったなんらかの関係があって、軍艦マーチが伝わったらしいです。韓国の人たちはミャンマーで「ニムのための行進曲」が歌われることを、大日本帝国の植民地主義との対抗関係として位置づけているのですが、そうした点も私には興味深いなあと思われまして。ぜひこれはお話ししたかったネタでした。

藤野 とっておきをここで出していただいて(笑)、ありがとうございます。伍先生どうですか。

伍 真鍋先生が香港と韓国との連帯について紹介してくださって、とても勉強になりました。

補足的に、一つのエピソードを紹介します。2009年に「広深港高速鉄道反対運動」という、広州市と深圳・香港を結ぶ高速鉄道の建設をめぐって大きな反対運動が起きました。香港から乗り継ぎなしで北京や上海といった大陸の主要都市に直接アクセスできるようになる一方で、多額の財政支出に対しての強い批判から起こったもので、デモや集会、署名活動など様々な形で、反対運動が進められました。

そのなかで一部の運動参加者たちが、「苦行」という非暴力活動を実践しています。これは、参加者が靴を履かずに裸足のままで、5列に並び、前の人と少しスペースを開けて、太鼓の音に合わせて足を1歩ずつ前に進める、そして26歩進んだところで膝をつき、頭を下げ、手を上に掲げるといったものです。この26という数字は、香港の領域内におけるこの高速鉄道の長さが26キロであることに由来しています。

この苦行というスタイルは実は、韓国の農民を介して香港に持ち込まれたそうです。2005年12月に香港で第6回WTO閣僚会議が開催された際に、「WTOに反対する国際農民連合」が香港でも反対運動を行ないましたが、その主役になったのが韓国の農民たちなんですね。彼らは「三步一拝」と言っていて、香港の街の中心部で、3歩進んでひざまずき頭を下げることを繰り返すパフォーマンスを行いました。香港のデモ参加者は、この三步一拝に啓発されて苦行という反対運動を行なったんです。武蔵大学の安藤丈将先生は、「それは、グローバルな運動とローカルな運動との出会いで生じた化学反応の産物である」と指摘しています¹⁰⁾。

このように見ますと、社会運動を考察する際に、やはり国際的な連携を無視してはいけないと思いますね。社会運動の理念やレパートリーは、さまざまなネットワークやメディアを通じて、国境を越えていています。社会運動という領域においても、インターネットの普及など新しいメディアを通して、各地域間に強い連帯が形成され始めているということです。たとえば2019年の香港デモで見せた香港人の自由・民主主義への切望が、メディアの報道により世界中に広く知られるように

なって、共鳴する人々が大勢います。特に2020年以降のタイやミャンマーでの民主化運動は、香港の抗議活動に啓発された部分が多いとされています。市民的不服従運動の理念から、参加者の動員方法、国際社会への発信の重視、警察・軍と対峙する際の戦術、そして儀礼的な要素まで、香港デモのありとあらゆる側面が他の地域の運動で再現されています。世界各地で民主化を実現させるために努力している人々を結び付け、相互に啓発へと導くものだと思います。

真鍋 すごく面白いですね。私はコロナが拡大する直前に光州に行ったのですが、光州の全南大学^{チョンナム}という、光州事件の始まりになったところに「五・一八民主化運動記念館」という施設があり、その芳名帳を見ると結構、香港からの方がいろいろとコメントを残していました。

藤野 新しいメディアが出てくる前から当然、グローバルかつローカルな連帯がありましたが、現在では情報を『タクシー運転手』が描いたようにこっそり持ち出す必要もなく、即座にインターネットでつながれる時代になった。こうした時代における連帯は、これからも考えていくべき課題だと強く考えさせられました。一方で、グローバル化が進み、インターネットでの繋がりが強くなったところで、アイデンティティは弱くなるかという、むしろ強くなる面も当然現れてくるのであって。新しいメディア時代のデモを〈儀礼〉として考えてみた今日の対談は、非常に意義があったのではないかと思います。

注

- 1) 韓国において「親日・反日」という場合、「日」が含意するのは、大日本帝国および植民地主義的な思考や構造を指すことが多い。「親日派」とは、日本統治期に植民地エリートして既得権を得、解放後もポストコロニアル状況の中でその支配的な地位と既得権を維持する階層や人々をさす。
- 2) Branigan, T., 2017, May 14, “Joshua Wong, the student who risked the wrath of Beijing: It’s about turning the impossible into the possible”, The Guardian, available at: <https://www.theguardian.com/world/2017/may/14/joshua-wong-the-student-who-risked-the-wrath-of-beijing-its-about-turning-the-impossible-into-the-possible> (accessed 7 February 2018)
- 3) 「胡志偉牧師為佔中講句公道話『教會需要不斷挑戰建制』」(2013-9-30)『蘋果日報』, <http://hk.apple.nextmedia.com/news/art/20130930/18443888> (アクセス日: 2018-1-15)
- 4) 月脚達彦「近現代韓国・朝鮮における街頭集会・示威」『韓国朝鮮の文化と社会』19号、2020年
- 5) 龔立人 1999『解放神學與香港困境』香港基督徒學會
- 6) Public Opinion Programme, 2005–2007, Onsite survey on July 1 rally 2004–2007, University of Hong Kong (<http://www.hkupop.hku.hk/english/report/>, 2021.3.10)
- 7) 譚蕙芸 2019「太子站外, 831後的七天」『The News Lens』, <https://www.thenewslens.com/article/124650> (2021年7月12日確認)
- 8) 真鍋祐子「キャンドル集会にみる「過去と未来の対話」—「1987年フレーム」に表れた歴史意識から考える」『韓国朝鮮の文化と社会』19号、2020年
- 9) T.K. Park, South Korean Protest Music is Inspiring Hong Kong’s Demonstrators, “The Nation”, July 3, 2019. (<https://www.thenation.com/article/archive/hong-kong-protest-south-korea-music/>)
- 10) 安藤丈将 2019「『資本主義の夢』の消えた後に: 香港における広深港高速鉄道反対運動とその遺産」『ソシオロジスト: 武蔵社会学論集 21(1)』, 1-37